指揮棒のおはなし

～ How To Conduct Music ～

Vol. 4

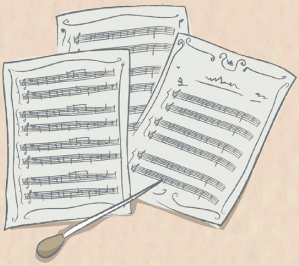
PICKBOY®
NAKANO CO., LTD.

川本貢司が語る
指揮の勉強のおはなし

Chapter 1 指揮者を目指して

「指揮者になりたい」と思い始めたのは中学生の頃で、きっかけは小澤征爾さんの本『ボクの音楽武者修行』を読んだことでした。そして中学３年生のとき地元でプロのオーケストラの演奏会を見て「これは指揮者になるしかない」と決心しました。そのときから東京藝大を目指したのですが、小さな町だったので音楽を教えてくれる人は学校の音楽の先生くらいしかいませんでした。和声は汽車で片道３時間くらいかけて習いに行き、ピアノと楽典はほぼ独学で。

問題は指揮です。本を買ってはみたけれどよくわからない。そうしているうちに生涯の師匠となるシャルル・デュトワがNHK交響楽団とストラヴィンスキーの《春の祭典》を初共演した演奏をテレビで見ました。もともと彼のレコードは聴いて好きだったのですが、実際に指揮を見たのは初めてで、もうひとめぼれです（笑）。「これを見て勉強する」と思い、デュトワの指揮した演奏が放送されたものは全部録画し、何百回も見て独学しました。そしてなぜか東京藝大に現役合格してしまいました。これには周りも、自分も驚きましたね（笑）。



大学時代の話は割愛します。いろいろなオーケストラのリハーサルや演奏会を見るために授業を犠牲にした結果、卒業のときにかなりの交渉術を発揮する必要があったということだけ言っておきます。大学４年生のときに民音の東京国際音楽コンクール指揮部門で第３位に入賞してデビューしたわけですが、それも試験と重なったりして（笑）。

デビューコンサートは初日が九州交響楽団、翌週が東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、翌々週が大阪フィル

ハーモニー交響楽団でしたが、初日に阪神淡路大震災が起こってしまいました。2週間後、僕たちのデビューコンサートが大フィルの震災後初業務だったようで、みんな「生きてることが嬉しい」という気持ちが入っていて、音がものすごく良かったことを、今でも覚えています。

Chapter 2 “生涯の師”との出会い

2001年から活動の拠点をヨーロッパに移し、ドイツのフォアポンメルン歌劇場第一専属指揮者やチェコのピルゼン放送交響楽団の音楽監督などを歴任してきましたが、今から6年前、自分が指揮を志したときから勝手に師と仰いできたマエストロ・シャルル・デュトワとの出会いが訪れました。

まずチューリヒのトーンハレでの演奏会のときに、「私はこれだけあなたのことが好きで、なぜあなたのことが好きになり、自分がどういうふうに指揮者になったか」というラブレターを書いて渡しに行ったんです。「あなたのことを尊敬しているから、ぜひあなたのリハーサルを見せていただきたい」と書いて、事務局に許可を取ってゲネプロの後で楽屋を訪ねました。そのときデュトワは疲れているようで手紙はそのまま袋に入れてしまいましたが、3か月後に彼の奥さんからメールが来て、「手紙を読んで気に入りました。NHK交響楽団のリハーサルを見に来ますか？」と言われて帰国し、見に行ったのが2009年12月。そこから約2か月間ほぼ毎週のように彼の演奏会を聴きに行きました。N響、バイエルン放送響、さらにジュネーブまで追いかけて行って、顔と名前を覚えてもらいました。

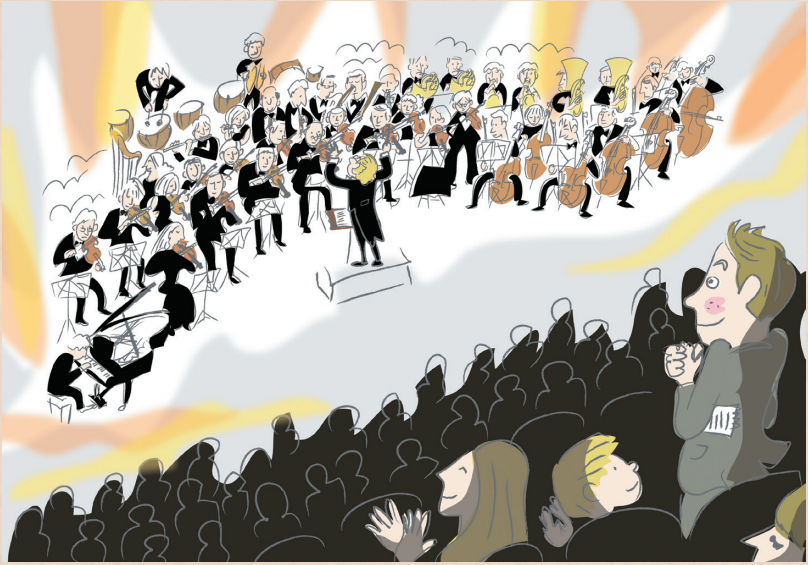
デュトワがアンセルメのもとで学んだように

だいぶ後になってからですが、食事に誘われて、なぜデュトワが僕に教えてくれるのかを語ってくれたことがあ

りました。僕にとって最も尊敬する人がシャルル・デュトワであるように、彼にとって最も尊敬する先生はエルネスト・アンセルメであり、やはり「レッスンはしないけれど、リハーサルとコンサートを見に来て勉強できるなら」と言われて、デュトワがジュネーブのコンセルヴァトワールに在籍した3年間、1回も欠かさず聴きに行ったそうです。そこで学んだことが彼のすべてだと言っていました。「若い指揮者はそうやって勉強すべきなのに、モントリオールにいた25年間、誰一人そう言ってくる人はいなかった」のだそうです。

アンセルメはドビュッシーやラヴェルといった作曲家と直接話をしていますから、デュトワが彼から伝え聞いていることを僕にも話してくれました。一方でデュトワ自身もストラヴィンスキーやヒンデミットと直接の親交があったので、やはりそういう人から聞いた話を僕に伝えてくれます。

デュトワのリハーサルを見に行くときには僕は必ず新しくスコアを買って、彼が話していることやリハーサルでやっていることを全部書き留めています。僕が“デュトワ・セット”と呼んでいるライブラリーは今ではかなりの数になり、自分の宝物となっています。



Chapter 3 指揮者と指揮棒の役割

結局、指揮は理屈だけ勉強してもだめで、先人がやっていることを見て、積み重ねていかなければなりません。偉大な人々の演奏から、良い伝統とかスタイルを学ぶということが重要なのです。そういう伝統を継承するということは、自分たちが音楽の歴史の中に入っている時点で「やらなければならないこと」のひとつです。

つまり、マエストロ・シャルル・デュトワが継承したものは元はと言えばエルネスト・アンセルメから来ていて、アンセルメもその前の世代から継承し、それをさらに発展させたものを持っていたわけです。そういうマクロの見方が必要です。

「指揮棒は楽器である」という考え方

指揮棒に関しては、僕は指揮者を目指そうと思ったときから今に至るまで木製の指揮棒しか使っていません。縁あってマエストロ・シャルル・デュトワに出会うことができたように、指揮棒についても何年も理想のものを探し続けた結果、PICKBOY の指揮棒にたどり着いたのです。

指揮棒は手の動きの延長であり、自分の身体だけではできない大きな動きを表現可能にしてくれるものです。ですから、持ちやすく動かしやすい指揮棒を選ぶことで、意思がより伝わりやすくなります。そういう指揮棒を自分で探すべきだと思います。これは楽器と同じこと。みんな楽器を選ぶときには、自分にとって演奏しやすい楽器を選ぶじゃないですか。指揮をする自分の手の動きに音が付いてくるわけですから、「指揮棒も楽器である」という考えを一貫して持っています。

My Choice

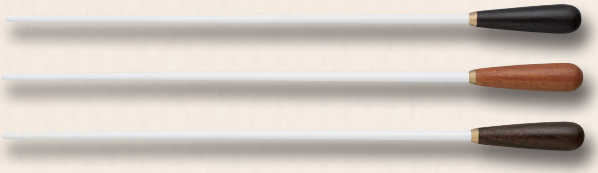
川本貢司が選ぶお気に入りグッズ

PICKBOY
NAKANO CO., LTD.

川本貢司監修『メープルシャフト』シリーズ指揮棒（ショートサイズ）

FTK-150EB/W、FTK-150MH/W、FTK-150RW/W　各￥1,500＋税

Material | *Grip*: エボニー , マホガニー , ローズウッド　*Shaft*: メープル



僕が監修して作った、シャフトがメイプルである木製の指揮棒です。まず 26cm と非常に短いことに、見た人はたいてい驚きます。でも自分の視界に入る長さを考えるとこのくらいになるし、何よりコントロールしやすい。長さだけでなく、指揮棒に重さを感じてしまうと振り切れなくなりますから、体に無駄な力が入るようなものを選ぶべきではないと思います。

ポイントは持ったときのバランスです。持ち手の材質が 3 種類用意されていますが、僕はエボニー（EB）がメインで、ときによってローズウッド（RW）を使います。その日の感じ方や指揮棒の個体差による違いもあるので、シャフトとグリップのバランスがもっともしっくり来るものを選んでいます。また、ヨーロッパのホールは木を生かした内装が多いので、シャフトはホワイトにペイントしてある方が見やすいです。

もちろんこのモデルが万人にとってもベストとは思いません。選択肢はたくさん用意されていますから、その中から自分に合うものを選ぶことが大切だと思います。

［profile］ 川本貢司（かわもと・こうじ）

島根県生まれ。1995年、東京芸術大学音楽学部指揮科を卒業。指揮法を若杉弘、遠藤雅古、小田野宏之、グスタフ・マイヤー、フランシス・トラヴィスの各氏に師事。在学中の1994年、若干22歳で第10回東京国際音楽コンクール指揮部門において第3 位を受賞。その後、国内外の主要オーケストラと共演を重ね現在に至る。2009年より世界各地でシャルル・デュトワ氏のリハーサルに帯同し、巨匠より直々に薫陶を授かり「音の魔術師」の神髄を会得する。

正統的な音楽語法を踏襲しつつ、現代的な感性と明晰な解釈で歌い上げる斬新で透明感ある演奏スタイルは、海外においても高い評価を確立している。2001から6年間、フォアポンメルン歌劇場第一専属指揮者ならびに、北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者を兼任し、オペラ指揮の経験を重ねた。在任中の2003年、北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団を率いて東南アジアツアーを行う。2007年「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門に第3 位入賞。2008～2014年まで、チェコ・ピルゼン放送交響楽団音楽監督を務める。チェコ・スロヴァキアで音楽監督を務めるのは日本人初の快挙である。

これまでにプラハ放送交響楽団、イスタンブール国立交響楽団、スロヴァキア放送交響楽団、スペイン・マラガ交響楽団、スロヴェニア国立マリボル歌劇場管弦楽団、ザクセン・ランデスビューネン管弦楽団など欧州各国の主要オーケストラを指揮。2013年には名門スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団の定期公演にデビューを果たす。同年4月に中国杭州市の浙江交響楽団と共演。その後、同オーケストラとの再演を含め、福建省福州交響楽団、陝西省西安交響楽団など中国各地のオーケストラに相次いで客演。来シーズン以降も、中国全土での客演が予定されている。

●ホームページ　http://www.kojikawamoto.com